

①アライグマ(哺乳類)

哺乳類	国外外来種	
アライグマ		
分類		
目名	ネコ目	
科名	アライグマ科	
種名(亜種名:*)	アライグマ	
学名	<i>Procyon lotor</i>	
カテゴリー(北海道)	■A1/□A2/□A3/□B/□C/□D/□E/□h/□K	
カテゴリー(環境省)	■特定外来生物/□要注外来生物	
カテゴリー(日本生態学会ワースト100) / (IUCN世界の侵略的ワースト100)	■日本の侵略的ワースト100/□世界の侵略的ワースト100	
原産地	カナダ南部からメキシコ北部にかけて広く分布	
導入年代	不明	
初報告	1992年(*1)	
全国分布	47都道府県	
遼内分緯	133市町村(平成22年4月現在)	
導入の原因	飼育個体の逃亡・遺棄	
種の生態学的特性		
生活史型	メスは発情期になると、通常2~6個体と交尾する乱婚性の特徴をみせる(*10)。オスは交尾を終えると1~3日はメスと行動を共にするが、その後は完全に別行動をとり、子育てには参加しない(*11)。出産性は、一般的に個体数が安定している地域では、ほぼ1対1になるが(*11,13)、急増中の個体群の場合、メスの比率が高くなることも報告されている(*15)。	
形態	体型には性的二型があり、全体的にオスが大型である。体重: 3.6~9.0kg、全長: オス63.4~105.0cm、メス60.0~90.9cm、尾長: オス20.0~40.5cm、メス19.2~34.0cm(*16)	
繁殖形態	2~3月に交尾期を迎え(*11)、54~70日の妊娠期間を経て(*15,16)、平均3~4頭の子を出産する(*11)。メスの妊娠率は当歳個体で0~73%、2歳以上の個体で68~100%(*11)。1歳前死亡率は35~48%程度と比較的低い(*12)。出産は早いもので4月に始まり、6月上旬頃までに終わるのが一般的なパターンである(*11)、繁殖に失敗したメスの中には、同じ年のうちに2度目の発情期がくることもある。	
生息環境	通常、餌や水資源、巢環境などの整った地域に定住する複数のメスを単独のオスが囲う形で行なわれるため(*14)、一般的には湿潤で水資源の豊富な森林環境を中心に分布が広がる傾向が強い(*15,16)。しかし、一定の水資源さえ確保できれば、本来は生息不適地である乾燥地帯や都市部まであらゆる環境に適応する力を持っており(*15,16)、日本においても、北海道の牧場地帯から、鎌倉や大阪などの都市域まで全国に広く定着が確認されている(*6)。	
特記事項	夜行性、半冬眠、木登りが得意で大径木の樹洞などを好んで利用する(*15,16)。	
影響		
被害の実態・おそれ	<ul style="list-style-type: none"> ①生態系にかかる影響 ①直接捕食による鳥類や小型の哺乳類、魚類、両生爬虫類、昆虫類、甲殻類などへの影響(*2,5,8)、感染症の伝播(*3,9)、在来種との競合(*4) ②農林水産業への影響 ②トウモロコシやイチゴ、メロン、スイカなど農作物の食害、養鶏場、養魚場における食害(*2) ③人の健康への影響 ③原産国では、狂犬病、アライグマ回虫症の媒介者として有名(*3) 	
被害をもたらしている要因	<ul style="list-style-type: none"> ①生物学的要因 ①天敵の不在、雑食性、高い繁殖能力、樹上性、半冬眠 ②社会的要因 ②テレビアニメによる一大ペットブームの到来と同時多発的な遺棄、放逐の発生(*6) 	
特徴並びに近縁種、類似種	5本の独立した肢指、蹠行性、眉間の黒い線、耳の縁取りが白い、はっきりとした白いヒゲが特徴(*17)。タヌキ、ハクビシンなどと見間違えられることが多い。	
対策	平成6年より狩猟獣に指定。平成10~11年に「アライグマ被害対策検討協議会」、平成11~13年に「アライグマ対策検討委員会」を設置するとともに調査研究を進め、平成15年度より「北海道アライグマ対策基本方針」を定め、排除を進めている。また、「北海道動物の愛護及び管理に関する条例」でアライグマを特定移入動物に指定し、新たなアライグマの侵入予防をはかっている。(特定外来生物指定後に解除) 特定外来生物(2005.6.1)	
その他の関連情報	特になし	
分布図	■有り/□無し	
写真/イラスト	■有り/□無し	
備考		
参考文献(省略、ホームページで全文名掲載)		

